

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：33916

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25870871

研究課題名(和文) 英語の軽動詞についての共時的・通時的研究

研究課題名(英文) A diachronic and synchronic study of light verbs in English

研究代表者

久米 祐介 (KUME, YUSUKE)

藤田保健衛生大学・医学部・講師

研究者番号：40645173

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は同族目的語構文を結果と様態の2種類に分類し、歴史コーパスから得られたデータを分析することによって、それぞれの歴史的発達過程を明らかにし、現代英語で観察される特に様態の同族目的語構文の特異性に理論的かつ経験的な説明を与えることを目的とした。具体的には、様態の同族目的語構文は中英語から近代英語にかけて、屈折の水平化に伴いvPからDen Dikken (2006)で提案されたRPへと再分析され、同族目的語は叙述名詞に変化した。このRP分析をhave軽動詞構文にも拡張し、中英語から近代英語にかけてhaveは本動詞から軽動詞に文法化し、事象名詞は叙述名詞に変化した。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to clarify the historical development of cognate object constructions by analyzing the data from historical corpora and give a theoretical and empirical account to idiosyncrasies of the construction in Present-day English. More precisely, manner cognate object constructions underwent the structural change from vP to RP, proposed in Den Dikken (2006), due to the inflectional leveling between ME and EModE. And the RP analysis is applied to have light verb constructions. In the course of the development, have underwent grammaticalization to become a light verb and its event nominal came to be analyzed into a predicate nominal.

研究分野：英語学

キーワード：統語論 生成文法 言語変化 文法化

1. 研究開始当初の背景

英語における軽動詞という範疇は意味論で議論されていたが、統語論や言語変化の分野では、体系的な研究はなされていなかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、現代英語に見られる軽動詞を含む構文や同族目的語構文の特異性について、通時的観点から実証的かつ理論的な説明を与えることである。

3. 研究の方法

一般的な文法規則からは予測できない軽動詞や同族目的語の振る舞いを共時的に観察したうえで、歴史コーパスなどを用いて通時的に言語データを収集・分析し、その起源を探る。そして、Chomsky (1995)以降の論文によって提唱される極小主義(Minimalist)による生成文法理論と Hopper and Traugott (2003)によって大きく発展した文法化(Grammaticalization)の研究に基づいて、どのように当該の構文が発達し、なぜ軽動詞や同族目的語が現代英語に見られる特異性を示すようになったのかを説明する。

4. 研究成果

現代英語の同族目的語構文には結果と様態の2種類の解釈が可能であるという Matsumoto (1996)、中島・池内 (2005)の分析に従い、両同族目的語構文の歴史的発達過程を明らかにし、結果の同族目的語は古英語から一貫して対格が付与される vP 構造であるのに対して、様態の同族目的語は古英語から中英語にかけて与格(具格)が付与されることで様態の解釈を得ていたが、近代英語以降に屈折の水平化に伴い与格が付与されなくなった結果、叙述名詞に変化したと主張した。ここでは、Den Dikken (2006)で提案された(1)の RP 構造を採用し、(2)から(3)の構造変化を仮定した。

(1) [RP XP [R RELATOR [YP]]]
(Den Dikken (2006: 11))

(2) [vP Subj [v ø [VP V [DP CO-Dat]]]]

(3) [RP vP [R' ø [QP CO]]]

(3)では、RP 指定部にある vP と補部の同族目的語が機能主要部 R によって叙述関係を結ぶことによって、様態の解釈が得られる。現代英語において、様態の同族目的語が叙述名詞に変化したという仮定を裏付ける経験的証拠として、まず様態の同族目的語のみ受動化を受けないことがあげられる。

(4) a. ?A beautiful smile was smiled.
b. * A sudden smile was smiled.
(Matsumoto (1996: 205))

受動化が格の吸収によって生じると仮定すれば、そもそも格が付与されない(3)の構造では受動化は生じえないことになる。次に、様態の同族目的語には不定性効果が見られる。

(5) John lived a happy life.
= John lived happily.
(Ando (2005: 38-39))

(6) Sam smiled the/every beautiful smile.
≠ Sam smiled beautifully.
(Kitahara (2011: 33))

(5)に見られるように、不定冠詞が先行した同目的語は様態副詞と言い換えられるため様態の解釈を持つが、(6)に示すように、定冠詞や強数量詞を伴う同族目的語は様態副詞に言い換えができず、結果の解釈のみを持つ。この様態の同族目的語に見られる不定性効果は叙述名詞の特徴の一つだと言われている。最後に、様態の同族目的語は叙述名詞と同様に指示代名詞での置き換えを許さない。

(7) *Mary smiled a sudden smile_i and **it** was attractive.
(cf. Matsumoto (1996: 206))

このように様態の同族目的語は叙述名詞と同様の振る舞いを示すため、(3)の構造を仮定することには一定の妥当性があると結論付けた。

さらに、(3)の構造を have 軽動詞構文に拡張し、have の本動詞から軽動詞の文法化を主張した。現代英語では、have は事象名詞を選択するいわゆる軽動詞構文があり、事象名詞は一般に不定冠詞とともに現れる。

(8) have a swim

(9)に示すように、have 軽動詞構文は受動化を受けない。

(9) *a swim was had.

古英語の have 軽動詞構文には事象名詞に対格が付与されており、受動化の事例も観察された。中英語では、屈折の水平化の影響で、対格が付与されているかどうかは形態的に判断ができなくなるが、依然として受動化の事例が見られたため、対格が付与されていたことが分かる。近代英語のコーパスからは、受動化された have 軽動詞構文は検出されなかった。また、古英語の歴史コーパスから検出された have が選択する bite, fight, life, rest, sleep, talk, walk の事象名詞 65 例において、指示詞、属格代名詞、強数量詞、関係詞などとの共起から定性が認められる事例は 25 例で、約

38.4%であった。同様の事例において、中英語のコーパスから検出された93例では、定性の認められる事例は22例で、約23.7%、初期近代英語では57例中3例で約5.3%にとどまった。これらの観察から、Burzio (1986)の一般化に従って、中英語まで have は外項に意味役割を補部の事象名詞に対格を付与する本動詞であり、近代英語以降に意味の漂白化を受け、本動詞から軽動詞へと文法化し、補部の事象名詞は叙述名詞へと変化したと主張した。

(10) [_{VP} Subj [_V \emptyset [_{VP} have [_{DP} EN-Acc]]]]
 [_{RP} Subj [_{R'} have [_{QP} EN]]]

(10)では、RP 指定部の主語と補部の事象名詞が R 主要部の have によって叙述関係を結んでいる。have は語彙動詞として主語に動作主の意味役割を、DP である事象名詞に対格を付与していたのに対して、再分析後では、主語は have からではなく、事象名詞と叙述関係を結ぶことにより意味役割が付与され、事象名詞は定性の弱化によって D が消失し、叙述名詞 (QP) に変化しており、対格は付与されない。様態の同族目的語の場合と同様に、もし受動化が格の要因で起こるとすれば、そもそも格付与が生じない(10)の構造では受動化は起こりえないことになり、(9)の非文法性が説明される。

引用文献

安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』開拓社、東京。

Burzio, Luigi (1986) *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*, Reidel, Dordrecht.

Dikken, M. den (2006). *Relators and linkers: The syntax of predication, Predicate Inversion, and copulas*, MIT Press, Cambridge, MA.

Kitahara, Kenichi (2011) "Cognate Object Constructions are Not Monotransitive Constructions," *Tsukuba English Studies* 30, 23-50.

中島平三・池内正幸 (2005) 『明日に架ける生成文法』開拓社、東京。

Matsumoto, Masumi (1996) "The Syntax and Semantics of the Cognate Object Constructions," *English Linguistics* 13, 199-220.

5. 主な発表論文等
 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6件)

Yusuke Kume (2015) "From Manner Cognate Object to Predicate Nominal: A Syntactic Change in the History of English," *IVY*, Vol. 48, pp. 81-106. 査読有.

久米祐介 (2015) 「軽動詞構文と同族目的語構文における叙述名詞句の発達について」『日本英文学会第87回大会 Proceedings』pp. 80-81. 査読無.

久米祐介 (2015) 「同族目的語構文の歴史的発達: live と die を中心に」『近代英語研究』第31号, pp. 19-43. 査読有.

久米祐介 (2014) 「同族目的語構文の統語・意味変化について」『日本英文学会中部支部第65回大会 Proceedings』pp. 200-201. 査読無.

Yusuke Kume (2014) "A Corpus-based Analysis of the Historical Change of Congate Objects in English," *Linguistics and Philology*, Vol. 33, pp. 21-34. 査読有.

久米祐介 (2013) 「Have/take an N 構文について」『JELS』第30号, pp. 118-124. 査読有.

〔学会発表〕(計 3件)

軽動詞構文における事象名詞の通時的変化について
 コーパスからわかる言語の可変性と普遍性 2015年9月8日 於: 東北大学

軽動詞構文と同族目的語構文における叙述名詞の発達について
 日本英文学会第87回大会 2015年5月24日 於: 立正大学

同族目的語構文の統語・意味変化について

日本英文学会中部支部大会 2013年10月
5日 於：椋山女学園大学

〔図書〕(計 1件)

久米祐介 (2013) 「軽動詞構文と同族目的語構文の共時的・通時的関連性について」『言語変化—動機とメカニズム』pp. 16-28, 開拓社, 査読有.

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者 久米 祐介 (KUME YUSUKE)
藤田保健衛生大学医学部 英語 講師

研究者番号：40645173

(2)研究分担者
()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：